



佳作

書評 筒井康隆著 『天狗の落し文』（新潮社、2004）

（和泉新書・文庫コーナー：新潮文庫 つ-4-46）

国際日本学部3年 米長洋和

本書は、かのSFの大家筒井康隆氏による、全356篇から成る文学史上初「全作、盗作自由」の短編集である。

その短編ぶりは圧巻で、例えば次のような具合である。

「彼の遺伝子は完璧に近かったが、ただひとつ、高所恐怖症の遺伝子が混っていた。

彼は知力、体力ともに優秀だったので、宇宙飛行士に選ばれた。」

僅か二行。だが、一篇の話として体を成している。

次のようなタイプもある。

「皺くちやでよれよれの汚いお札たった一枚は『綺麗な金』という気がする。皺ひとつない新札の札束は『汚い金』という気がする。

なぜだ。」

短編ですらなく、著者の眩きである。実に単純明快ながら含蓄があり、読者を唸らせる。

かくのごとく一風変わった本書を論じるに、大きく3点が挙げられる。

1点目は、やはりこの「文学作品」の様式の斬新さである。全文が二、三行の短文という訳ではないが、最長でも4頁であり、まさに超・超短編集といえる。没にしたが、捨て置くには惜しい文をまとめて一冊にする手法は、数々の前衛的、実験的な作品を発表してきた筒井氏ならではのといえよう。全作盗作自由の謳い文句も、ネタの不必要な浪費を嫌った為と思われ、いかにも氏らしい。

2点目は、あまりに多岐にわたる、文のジャンルの多さである。ショートショートらしきものから、著者十八番のエログロナンセンス、格言めいたものに、はたまた単なる言葉遊びや、著者の昔話と思しきものまで様々。ゆえに感想も、はっと気付かされ感心することもあれば、実に下らなく理解し難いこともある。通常、短編集でもその各編には統一感があるが、意図的に全くタイプの違う文を繋げて配置し、雑多さを強調する本書の構成は、他に類を見ない。長さも文体も内容も異なる作品が雑然と居並び、さながらネタのドン・キホーテといった様相である。

3点目は、有象無象の作品群に時折潜む名文の存在である。全体を通して、ひどくナンセンスな作品や、露骨に性や排泄を扱った低俗な作品が多く散見されるが、そのあまりの下らなさに著者の正気を疑いかけたところにキラリと光るエッセンスをねじ込む術は、まさしく筒井ワールド全開。「ゴダールでござーる」なるギャグの直後に、作家の談話のあるべき姿を鋭く語る。知的さと馬鹿馬鹿しさのアンバランスな融合が、読者にバカと天才は紙一重という語を想起させ、著者の知性と変態性をいかんなく示すのである。

以上に述べた通り、本書の特徴は兎にも角にも斬新奇抜、これに尽きるであろう。超短文が次々現われ出る様は心地良く、全体のストーリーも無いので電車内など僅かな時間に読むには最適。また解説で小林恭二氏が述べる通り、本書は著者の作品の要素の集大成とも捉えられ、他の作家では味わえない下品かつ秀逸な知性、筒井イズムを存分に堪能できる。好みは大きく分かれるだろうが、著者のセンスに合致する読者にとっては、最高の暇潰しとなること請け合いの一冊であると思われる。